

電兎城海

花鏡泉

庫本文空青

一

「自分も実は白状をしようと思つたです。」

と汚れ垢着きたる制服を絡まとえる一名の赤十字社の看護員は静しずかに左右を顧みたり。

渠かれは清国しんこくの富豪柳氏りゅうの家なる、奥まりたる一室に夥多あまたの人数にんずに取囲まれつつ、椅子に懸かりて卓つくえに向えり。

渠を囲みたるは皆軍夫なり。

その十数名の軍夫の中に一人逞にんくましき漢おのこあり、屹きとかの看護員に向いおれり。これ百人長なり。海野うんのと謂いう。海野は年配三十八九、骨太なる手足飽くまで肥えて、身の丈もまた群を拔けり。

今看護員の謂出いいいだせる、その言ことばを聴ひくと齊ひとしく、

「何！ 白状をしようと思つたか。いや、實際味方の内情を、あの、敵に打明けようとしたんか。君。」

謂ことばう言ややあらかりき。

看護員は何気なく、

「そうです。撲つな、蹴るな、貴下酷いことをするじゃありませんか。三日も飯を喰わさないで眼も眩くらんでいるものを、赤条々はだかにして木の枝へ釣つるし上げてな、銃の台尻でもって撲なぐるです。ま、どうでしょう。余り拷問ごうもんが厳しいので、自分もつい苦しくって堪たまりませんから、すっかり白状をして、早くその苦痛を助りたいと思いました。けれども、軍隊のことに就いては、何にも知つちやあいないので、赤十字の方ならば悉くわしいから、病院のことなんぞ、悉く謂いつて聞かしてやつたです。が、そんなことは役に立たない。軍隊の様子を白状しろつて、ますます酷く苛さいむです。実に苦しくって堪たまらなかつたですけれども、知らないのが真実ほんとうだから謂いえません。で、とうとう聞かさないでしまいました。いや、実に弱つたです。困りましたな、どうも支那人の野蛮なのにやあ。何しろ、まるでもつて赤十字なるものの組織を解さないで、自分等を何がなし、戦闘員と同一おんなじに心得てるです。仕方ありませんな。」

とあだかも親友に対して身の上談話げんわをなすがごとく、渠は平氣に物語れり。
しかるに海野はこれを聞きて、不心服なる色ありき。

「じゃあ何だな、知つてれば味方の内情を、残らず饒舌しゃべツちまう処だつたな。」

看護員は軽く答えたり。

「いかにも。拷問が酷かったです。」

百人長は憤然として、

「何だ、それでも生命があるでないか、たとい肉が爛れようが、き、皮が裂けようがだ、呼吸があつたくらいは拷問なら大抵知れたもんでないか。それに、いやしくも神州男児で、殊に戦地にある御互だ。どんなことがあるうとも、謂うまじきことを、何、撲られた位で痛いというて、味方の内情を白状しようとする腰拔がどこに在るか。勿論、白状はしなかつたさ。白状はしなかつたに違無いが、自分で、知つてれば謂おうというのが、既に我が同胞の心でない、敵に内通も同一だ。」

と謂いつつ海野は一步を進めて、更に看護員を一睨せり。

看護員は落着済まして、

「いや、自分は何も敵に捕えられた時、軍隊の事情を謂つては不可ぬ、拷問を堅忍して、秘密を守れという、訓令を請けた事も無く、それを誓つた覚も無いです。また全くそうでしょう、袖に赤十字の着いたものを、戦闘員と同一取扱をしようとは、自分はじめ、恐らく貴下方にしても思懸はしないでしょう。」

「戦地だい、べらぼうめ。何を！ 呑気なことを謂やがんでい。」

軍夫の一人つかつかと立かりぬ。百人長は応揚に左手を広げて遮りつつ、

「待て、ええ、屁でもない喧嘩と違うぞ。裁判だ。罪が極つてから罰することだ。騒ぐない。噪々しい。」

軍夫は黙して退きぬ。ぶつぶつ口小言謂いつつありし、他の多くの軍夫等も、鳴を留めて静まりぬ。されどことごとく不穩の色あり。眼光鋭く、意氣激しく、いずれも拳に力を籠めつつ、知らず知らず肱を張りて、強いて沈静を装いたる、一室にこの人数を容れて、燈火の光冷かに、殺気を籠めて風寒く、満洲の天地初夜過ぎたり。

二

時に海野は面を正し、警むるがごとき口氣もて、

「おい、それでは済むまい。よしんば、吾々同胞が、君に白状をしろと謂つたからって、日本人だ。むぎむぎ饒舌るといふ法はあるまいじゃないか、骨が砂利になろうとままよ。それをそうやすやすと、知ってれば白状したものをなんのツて、面と向って吾々に謂われ

た道理か。え？ どうだ。謂われた義理ではなからうでないか。」

看護員は身を斜めにして、椅子に片手を投懸けつつ、手にせる鉛筆を弄^{もてあそ}びて、

「いや、しかし大きにそうかも知れません。」

と片頬^{かたほ}を見せて横を向きぬ。

海野は睜^{みは}りたる眼^{まなこ}をもて、避けし看護員の面^{おもて}を追いたり。

「何だ、そうかも知れません？ これ、無責任の言語を吐^いいちやあ不可^{いかん}ぞ。」

またじりりと詰^{うづ}寄りぬ。看護員はやや俯^{うつむ}向きつ。手なる鉛筆の尖^{さき}を管^なめて、筒服^{ズボン}の膝に落書しながら、

「無責任？ そうですか。」

渠^{かれ}は少しも逆らわず、はた意に介^させる状も無し。

百人長は太^{おお}に急^いぎて、

「ただ（そうですか）では済まん。様子に寄つてはこれ、きつと吾々に心得がある。しつかり性根を据えて返答せないか。」

「どんな心得があるのです。」

看護員は顔を上げて、屹^{きつ}と海野に眼を合せぬ。

「一体、自分が通行をしておる処を、何か待伏でもなすつたようでしたな。貴下方大勢で、自分を担ぐようにして、此家へ引込んだはどういうわけです。」

海野は今この反問に張合を得たりけむ、肩を揺りて氣競いかかれり。

「うむ、聞きたいことがあるからだ。心得はある。心得はあるが、まず聞くことを聞いているからのこととしよう。」

「は、それでは何か誰ぞの吩咐でもあるのですか。」

海野は傲然として、

「誰が人に頼まれるもんか。吾の了簡で吾が聞くんだ。」

看護員はそとその耳を傾けたり。

「じゃあ貴下方に、他を尋問する権利があるので？」

百人長は面を赤うし、

「轉るない！」

と一声高く、頭がちに一呵しつ。驚破と謂わば飛薨らんず、氣勢激しき軍夫等を一わたりずらりと見渡し、その眼を看護員に睨返して、

「権利は無いが、腕力じゃ！」

「え、腕力？」

看護員はひしひしとその身を擁せる浅黄の半被股引の、雨風に色褪せたる、たとえば囚徒の幽霊のごとき、数個の物体を睭わして、秀でたる眉を顰めつ。

「解りました。で、そのお聞きになろうというのは？」

「知れてる！ 先刻から謂う通りだ。なぜ、君には国家という觀念が無いのか。痛いめを見るがづらいから、敵に白状をしようと思う。その精神が解らない。（いや、そうかも知れませんが）なんぎ、無責任極まるでないか。そんなぬらくらじや了見せんぞ、しつかりと返答しろ。」

咄々迫る百人長は太き仕込杖を手にしたり。

「それでどう謂えば無責任にならないです？」

「自分でその罪を償うのだ。」

「それではどうして償いましょう。」

「敵状を謂え！ 敵状を。」

と海野は少しく色解てどかと身重げに椅子に凭れり。

「聞けば、君が、不思議に敵陣から帰って来て、係りの将校が、君の捕虜になっていた間

の経歴に就いて、尋問があつた時、特に敵情を語れという、命令があつたそうだが、どういふものか君は、知らない、存じませんの一点張で押お通とおして、つまりそれなりで済んだというが。え、君、二月も敵陣に居て、敵兵の看護をしたというでないか。それで、懇こんと篤くで、親切で、大層奴等のために尽力をしたそうで、敵将が君を帰す時、感謝状を送つたそうだ。その位信任をされておれば、いろいろ内幕も聞いたろう、また、ただ見たばかりでも大概は知れそうなものだ。知つてて謂わないのはどういう訳だ。あんまり愛国心がないではないか。」

「いえ、全く、聞いたのは呻吟声うめきこえばかりで、見たのは繃帶ほうたいばかりです。」

三

「何、繃帶と呻吟声、その他は見も聞きもしないんだ？ 可加減いかげんなことを謂え。」

海野は苛立いらだつ胸を押おえて、務めて平和を保つに似たり。

看護員は實際その衷情ちゆうじようを語るなるべし、いささかも飾気無く、

「全く、知らないです。謂つて利益になることなら、何秘かくすものですか。またちつとも秘

さねばならない必要も見出さないです。」

百人長は訝かしげに、

「してみると、何か、まるで無神経で、敵の事情を探ろうとはしなかったな。」

「別に聞いてみようともしないでした。」

と看護員は手をその額に加えたり。

海野は仕込杖もて床をつつき、足蹈して口惜げに、

「無神経極まるじやあないか。敵情を探るためには斥候や、探偵が苦心を重ねて

からに、命がけで目的を達しようとして、十に八九は失敗るのだ。それに最も安全な、最

も便利な地位にあつて、まるでうちやツて、や、聞こうとも思はない。無、無神経極ま

るなあ。」

と吐息して慨然たり。看護員は頸を撫でて打傾き、

「なるほど、そうでした。閑だとなんな処まで気が着いたんでしようけれども、何しろ病

傷兵の方にばかり気を取られたので、ぬかったです。ちつとも準備が整わないで、手当が

行届かないもんですから随分繁忙を極めたです。五分と休む間もない位で、夜の目も合わ

さないで尽力したです。けれども、器具も、薬品も不完全なので、満足に看護も出来ず、

見殺にしたいのが多いのですもの、敵情を探るなんて、なかなかどうしてそこどころまで、手が廻るものですか。」

「といまだ謂いも果ざるに、

「何だ、何だ、何だ。」

海野は獅子吼をなして、突立ちぬ。

「そりや、何の話だ、誰に對するどいつの言だ。」

と囁着かんずる語勢なりき。

看護員は現在おのが身のいかに危険なる断崖の端に臨みつつあるかを、心着かざるものごとく、無心——否むしろ無邪氣——の体にて、

「すべてこれが事実であるのです。」

「何だ、事実！　むむ、味方のためには眼も耳も吝んで、問わず、聞かず、敵のためには粉骨碎身をして、夜の目も合わさない、呼吸もつかないで働いた、それが事実であるか！

いや、感心だ、恐れ入った。その位でなければ敵から感状を頂戴する訳にはゆかんな。道理だ。」

と謂懸けて、夢見るごとき対手の顔を、海野はじつと瞻りつつ、嘲み笑いて、声太く、

「うむ、得難い豪傑だ。日本の名誉であろう。敵から感謝状を送られたのは、恐らく君を措いて外にはあるまい。君も名誉と思うであろうな。えらい！ 実にえらい！ 国の光だ。日本の花だ。吾々もあやかりたい。君、その大事の、いや、御秘蔵のものではあるうが、どうぞ一番ひとつ、その感謝状を拝ましてもらいたいな。」

と口は和らかにものいへども、胸に満みちたる不快の念は、包むにあまりて音ねに出でぬ。

看護員は異議もなく、

「確かありましたッけ、お待ちなさい。」

手にせる鉛筆を納おさむるとともに、衣兜かぶちの裡うちをさぐりつつ、

「あ、ありました。」

と一通の書を取とりだし出して、

「なかなか字体がうまいです。」

無雑作に差さしだ出して、海野の手に渡しながら、

「裂いいちやあ不可いけません。」

「いや、謹んで、拝見する。」

海野はことさらに感謝状を押おしいただ戴だき、書面を見る事久しかりしが、やがてさらさらと

繰広げて、両手に高く差翳しつ。声を殺し、鳴を静め、片唾を飲みて群りたる、多数の軍夫に掲げ示して、

「こいつを見い。貴様達は何と思う、礼手紙だ。可か、支那人から礼をいつて寄越した文だぞ。人間は正直だ。わけもなく天窓を下げて、お辞義をする者は無い。殊に敵だ、吾々の敵たる支那人だ。支那人が礼をいつて捕虜を帰して寄越したのは、よくよくのことだと思え！」

いうことば半ばにして海野はまた感謝状を取直し、ぐるりと押廻して後背なる一団の軍夫に示せし時、戸口に丈長き人物あり。頭巾黒く、外套黒く、面を蔽い、身体を包みて、長靴を穿ちたるが、わずかに頭を動かして、屹とその感謝状に眼を注ぎつ。濃かなる一脈の煙は渠の唇辺を籠めて渦巻きつつ葉巻の薰高かりけり。

四

百人長は向直りてその言を続けたり。

「何と思う。意気地もなく捕虜になつて、生命が惜さに降参して、味方のことはうっちゃ

つてな、支那人チャンチャンの介抱をした。そのまた尽力というものが、一通りならぬのだ。この中にも書いてある、まるで何だ、親か、兄弟にでも対するように、恐ろしく親切を尽してやつてな、それで生命いのちを助かつて、おめおめと帰つて来て、あまつさえこの感状を戴いた。どうだ、えらいでないか貴様達なら何とする？」

といまだ謂いもはてざるに、満堂たちまち黙を破りて、哄どつと諸声もろこえをぞ立てたりける、喧轟けんごう名状すべからず。国賊逆徒、売国奴、殺せ、撲れと、衆口一斉熱罵恫喝ねつばどうかつを極めたる、思い思いの叫声は、雑音意味も無き響ひびきとなりて、騒然としてかまびすしく、あわや身の上ぞと見る眼危あやうき、ただ单身みひとつなる看護員は、冷々然として椅子に僂よりつ。あたりを見たる眼配まくばりは、深夜時計の輾きしる時、病室に患者を護りて、油断せざるに異ならざりき。看護員に迫害を加うべき軍夫等の意気は絶頂に達しながら、百人長の手を掉ふりて頻しきりに一同を鎮むるにぞ、その命なきに前さきだちて決して毒手を下さざるべく、かねて警いましむる処やありけん、地踏鞣じだんだふ踏みてたけり立つをも、夥間同志が抑制なかまして、拳こぶしを押え、腕うでを扼やくして、野分のわけは無事に吹去りぬ。海野は感謝状を巻き戻し、卓子ていぶるの上に押遣りて、

「それでは返す。しかしこの感謝状のために、血のある奴等があんなに騒ぐ。殺せの、撲れのという氣組だ。うむ、やっぱり取っておくか。引裂ひつさいて踏んだらどうだ。そうすりや

ちつとあ念ばらしにもなつて、いくらか彼奴らが合点しよう。そうでないと、あれでも御国のためには、生命も惜まない徒だから、どんなことをしようも知れない。よく思案して請取るんだ、可か。」

耳にしながら看護員は、事もなげに手に取りて、海野が言の途切れざるに、敵より得たる感謝状は早くも衣兜に納まりぬ。

「取つたな。」と叫びたる、海野の声の普通ならざるに、看護員は怪むごとく、

「不可ないですか。」

「良心に問え！」

「やましいことはちつともないです。」

いと潔く謂放ちぬ。その面貌の無邪気なる、その謂うことの淡泊なる、要するに看護員は、他の誘惑に動かされて、胸中その是非に迷うがとき、さる心弱きものにはあらず、何等か固き信仰ありて、たといその信仰の迷えるにもせよ、断々乎一種他の力のいかんともし難きものありて存せるならむ。

海野はその答を聞くごとに、呆れもし、怒りもし、苛立ちもしたりけるが、真個天真なる状見えて言を飾るとは思われざるにぞ、これ実に白痴者なるかを疑いつつ、一応試に愛

国の何たるかを教えみんとや、少しく色を和^{やわ}げる、重きものいいの渋^{しぶ}がちにも、
 「やましいことがないでもあるまい。考えてみるが可^い。第一敵のために虜^{とりこ}にされるという
 があるか。抵抗してかなわなかつたら、なぜ切腹をしなかつた。いやしくも神州男児だ、
 腸^{はらわだか}を掴み出して、敵のしやツ面^{つら}へたたきつけてやるべき処だ。それも可^い、時と場合で捕わ
 れないにも限らんが、撲られて痛いからつて、平気で味方の内情を白状しようとは、呆れ
 果^{はて}た腰拔だ。それにまだ親切に支那人の看護をしてな、高慢らしく尽力をした吹^{ふい}聴^{ちよう}も
 ないもんだ。のみならず、一旦恥辱^{ちようむ}を蒙^{こう}つて、吾々同胞の面^{つら}汚^{よご}をしていながら、洒^{しや}垂^あ
 つくで帰つて来て、感状を頂きは何という心得だ。せめて土産に敵情でも探つて来れば、
 まだ言訳もあるんだが、刻苦して探つても敵の用心が厳しくつて、残念ながら分らなかつ
 たというならまだも恕^{じよ}すべきであるに、先に将校に検^{しら}べられた時も、前刻^{さつき}吾^{われ}が聞^きいた時も、
 いいようもあるものを、敵情なんぞ聞^きこうとも、見ようとも思わなかつたは、実に驚く。
 しかも敵兵の介抱が急がしいので、そんなことあ考えてる隙^{ひま}もなかつたなんぞと、憶^{おく}面^{めん}
 もなく謂^いうごときに至^{いた}つては言語同断と謂^いわざるを得ん。国賊だ、売国奴だ、疑^{うたが}つてみた
 日にやあ、敵に内通をして、我軍の探偵に来たのかも知れない、と言われた処で仕方がな
 いぞ。」

五

「さもなくば、あの野蛮な、残酷な敵がそうやすやす捕虜^{とりこ}を返す法はない。しかしそれには証拠^しがない、強^して敵に内通をしたとは謂^いわん、が、既に国民の国民たる精神の無い奴を、そのままにして見遁^みがしては、我軍の元氣の消長に関するから、きつと改悟の点を認むるか、さもなくば相当の制裁を加えなければならん。勿論軍律を犯したというでもないから、将校方は何の沙汰をもせられなかつたのであろう。けれども、吾々父母妻子をうつちやつて、御国のために尽そうという愛国の志士が承知せん。この室に居るものは、皆^みな君の所置振^{ぶり}に慊^{けん}焉^{えん}たらざるものがあるから、将校方は黙許なされても、そんな国賊は、きつと談じて、懲戒を加ゆるために、おのおの決する処^いがあるぞ。可^いか。その惡^{にく}むべき感謝状を、こういった上でも、裂いて棄てんか。やつぱり疚^やましいことはないが、ちよつとも良心^{とが}が咎^{とが}めないか、それが聞きたい。ぬらくらの返事をしちやあ不可^{いかん}ぞ。」

看護員は傾聴して、深くその言^{ことば}を味いつつ、默^{もく}然^{ねん}として身動きだもせず、やや猶^{ためら}予^いて言^{もの}わざりき。

こなたはしたり顔に附入りぬ。

「きつと責任のある返答を、此室ここに居る皆みんなに聞かしてもらおう。」

謂いいつつ左右みまわを睥みまわしたり。

軍夫の一人は叫いび出いせり。「先生。」

渠等かれらは親方といわざりき。海野は老壮士なればなり。

「先生、はやくしておくんなせえ。いざこざは面倒なぐでさ。」

「撲なぐつちまえ！」と呼ばわるものあり。

「隊長、おい、魂を据えて返答しろよ。へん、どうするか見やあがれ。」

「腰拔め、口いきくが最後だぞ。」

と口々にまたひしめきつ。四五名の足のばたばたと床板を踏鳴らす音ぞ聞こえたる。看護員は、海野がいわゆる腕力の今ははやその身に加えられるべきを解したらむ。されども渠はいささかも心に疚やましきことなかりけむ、胸苦しき氣振けぶりもなく、静しずかに海野に打向いて、

「ちつとも良心に恥じないです。」

軽く答えて自若たりき。

「何、恥じない。」

と謂返して海野は眼まなこを睜みはりたり。

「もう一度、きつとやましい処はないか。」

看護員は微笑ほほえみながら、

「繰返すに及びません。」

その信仰や極めて確乎かつこたるものにてありしなり。海野は熱し詰めて拳こぶしを握りつ。容易たやすくはものも得えいわでただ、ただ、渠みちを睨にらまえ詰めぬ。

時に看護員は従しやうよう容、

「戦闘員とは違います、自分をお責めなさるんなら、赤十字社の看護員として、そしておはなしが願いたいです。」

謂い懸けて片頬笑みつ。

「敵の内情を探るには、たしか軍事探偵というのがある筈はずです。一体戦闘力のないものは敵に抵抗する力がないので、遁にげらるれば遁にげるんですが、行やり損なえばつかまるです。自分の職務上病傷兵を救護するには、敵だの、味方だの、日本だの、清国だのという、さような名称も区別も無いです。ただ病傷兵のあるばかりで、その他には何にもないです。」

ちようど自分が捕虜とりこになつて、敵陣に居ました間に、幸い依頼をうけましたから、敵の病
 兵を預りました。出来得る限り尽力をして、好結果を得ませんと、赤十字の名折なわれになる。
 いや名折は構わないでもつまり職務の落度となるのです。しかしさつきもいいます通り、
 我軍と違つて実に可哀想だと思ひます。気の毒なくらい万事が不整頓で、とても手が届か
 ないので、ややともすれば見殺しです。でもそれでは済まないのです、大變に苦勞をして、
 ようよう赤十字の看護員という躰面だけは保つことが出来ました。感謝状はまずそのしる
 しといつていいようなもので、これを国への土産にすると、全国の社員は皆満足みんなに思うで
 す。既に自分の職務さえ、辛うじて務めたほどのものが、何の余裕があつて、敵情を探る
 なんて、探偵や、斥候せつこうの職分が兼ねられます。またよしんば兼ねることが出来るにして
 も、それは余計なお世話であるです。今貴下あなたにお談し申すはなことも、お検べしらになつて将校方
 にいったことも、全くこれにちがいはないのでこのほかにいうことは知らないです。毀譽きよほ
 褒貶うへんは仕方がない、逆賊でも国賊でも、それは何でもかまわないです。ただ看護員でさえ
 あれば可いい。しかし看護員たる躰面を失つたともいうことなら、弁解も致します、罪にも
 服なします、責任も荷になうです。けれども愛国心がどうであるの、敵愾てきが心がどうであるのと、
 さようなことには関係しません。自分は赤十字の看護員です。」

と淀みなく陳べたりける。看護員のその言語には、更に抑揚と頓挫なかりき。

六

見る見る百人長は色激して、砕けよとばかり仕込杖を握り詰めしが、思うこと乱麻胸を衝きて、反駁の緒を発見し得ず、小鼻と、髯のみ動かして、しらけ返りて見えたりける。時に一人の軍夫あり、

「畜生、好きなことを謂つてやがらあ。」

声高に叫びざま、足疾に進出て、看護員の傍に接し、その面を覗きつつ、

「おい、隊長、色男の隊長、どうだ。へん、しらばくれはよしてくれ。その悪済ましが気に喰わねえんだい。赤十字社とか看護員とかツて、べらんめい、漢語なんかつかいやあがつて、何でえ、駄よく言抜けようとしたつて駄目だぜ。おいらアみんな知てるぞ、間拔めい。へん畜生、支那の捕虜になるようじゃあとても日本で色の出来ねえ奴だ。唐人の阿魔なんぞに惚れられやあがつて、この合の子め、手前、何だとか、彼だとかいうけれどな、南京に惚れられたもんだから、それで支那の介抱をしたり、贖負をしたりして、内幕を

知つてもいわねえんじやあねえか。こう、おいらの口は淨玻璃じようはりだぜ。おいらあしよつちゆう知つてゐるんだ。おい皆聞みんなかつし、初手はな、支那人チャンチャンの金満ながれだまが流丸くらを啖みちつて路傍みちばに僵たおれていたのを、中隊長様が可愛想だつてえんで、お手当をなすつてよ、此奴こいつにその家まで送らしておやんなすつたのがはじまりだ。するとお前めえその支那人を介抱して送り届けて帰りしなに、支那人の兵隊が押込んだらう。面くらいやアがつてつかまる処をな、金満やつこの奴さん恩儀を思つて、無性に難有ありがたがつてゐる処だから、きわどい処を押隠して、ようよう人目を忍ばしたが、大勢押込んでゐるもんだから、秘かくしきれねえでどうどう奥の奥の奥ウの処むすめの、女の部屋へ秘したのよ。ね、隠れて五日ばかり対向さしむかいで居るあいだに、何でもその女むすめが惚れたんだ。無茶におツこちたと思ひねえ。五日目に支那の兵が退ひいてく時つかめえられてしよびかれた。何でもその日のこつた。おいら五六人で宿营地へ急ぐ途中、酷ひどく吹雪ふぶく日で眼も口もあかねえ雪の中に打倒ぶつたおれの、半分埋まって、ひきつけていた婦人おんながあつた。謂つてみりや支那人の片割かたわれではあるけれど、婦人だから、ねえ、おい、構うめえと思つて焚火たきびであつたためやると活返いきけえつた李花てえ女むすめで、此奴こいつがエテよ。別離わかれ苦に一目でえんでたつた一人駈出かけだしてさ、吹雪僵だおれになつたんだとよ。そりや後で分つたが、その時あ、おいらツちが負おふつて家まで届けてやった。その因縁いんえんでおいちよいち

よい父親おやじの何とかてえ支那の家へ出入でいりをするから、悉くわしいことを知ってるんだ。女むすめはな、ものずきじゃあねえか、この野郎が恋しいとて、それつきり床とこ着いてよ、どうだい、この頃じやもう湯も、水も通らねえッさ。父親おやじなんざ氣を揉もんで銃てつぱうきず創きずもまだすつかりよくならねえのに、此奴こいつの音信たよりを聞こうとて、旅団本部へ日参だ。だからもう皆みんなかうすす知ってるぜ。つい隊長様なんぞのお耳へ入って、御存じだから、おい奴さん。お前めえお檢しらべの時はなしもそのお談話はなしをなすつたろう。ほんによ、お前がそんなえな腰拔たあ知らねえから、勿体もつてえねえ、隊長様までが、ああ、可哀想だ、その女むすめの父親とか眼を懸けてつかわせとおつしやらあ、恐おそしい冥みよう伽がだぜ。お前そんなことも思わねえで、べんべんと支那兵チャンチャンの介抱かいほうをして、お礼をもらって、恥かしくもなく、のんこのしやあで、唯ただいま今歸きつて来はどういう了見だ。はじめに可哀想だと思つたほど、憎くてならねえ。支那の探偵いぬになるような奴あ大和魂を知らねえ奴だ、大和魂を知らねえ奴あ日本人のなかまじやあねえぞ、日本人のなかまでなけりや支那人も同おんなじ一だ。どてツ腹あ蹴破けつて、このわたを引ずり出して、囓かみつ潰つぶして吐出すんだい！」

「そこだ！」と海野は一喝して、はたと卓子ていぶるを一打うちせり。かかりし間他あいだの軍夫は、しばしば同情の意を表して、舌者の声を打消すばかり、熱罵ねつばを極めて威嚇いかくしつ。

楚歌^{そか}一身^{あつま}に聚りて集合せる腕力の次第に迫るにも関わらず眉宇^{びう}一点の懸念なく、いと晴々しき面色^{おももち}にて、渠は春昼寂^{せき}たる時、無聊^{むりよう}に堪えざるものごとく、片膝を片膝にその片膝を、また片膝に、交^{かわ}る交る投懸けては、その都度靴音を立つるのみ。胸中おのずから閑あるごとし。

蓋^{けだ}し赤十字社の元素たる、博愛のいかなるものなるかを信ずること、渠のごときにあらざるよりは、到底これ保ち得難き度量ならずや。

「そこだ。」と今卓子^{ていぶる}を打てる百人長は太^{おお}に決する処ありけむ、屹^{きつ}と看護員に立向^{たちむか}いて、

「無神経でも、おい、先刻^{さつき}からこの軍夫の謂うたことは多少耳へ入つたろうな。どうだ、衆目の見る処、貴様は国体のいかんを解さない非義、劣等、怯奴^{きようど}である、国賊である、破廉恥^{はれんち}、無気力の人外である。皆^{みんな}が貴様をもつて日本人たる資格の無いものと断定したが、どうだ。それでも良心に恥じないか。」

「恥じないです。」と看護員は声に応じて答えたり。百人長は領^{うなず}きぬ。

「可^{よし}、改めて謂え、名を聞こう。」

「名ですか、神崎愛三郎。」

七

「うむ、それでは神崎、現在居る、ここは一体どこだと思ふか。」

海野は太くあらたまりてさもものありげに問懸けたり。問われて室内を睥睨しながら、

「さよう、どこか見覚えていような氣持もするです。」

「うむ分るまい。それが分つていさえすりや、口広いことは謂えないわけだ。」

顔に苔むしたる髯を撫でつつ、立ちはだかりたる身の丈豊かに神崎を瞰下ろしたり。

「ここはな、柳が家だ。貴様に惚れている李花の家だぞ。」

今経歴を語ったりし軍夫と眼と眼を見合わして二人はニタリと微笑めり。

神崎は夢の裡なる面色にてうつとりとその眼を睥睨ぬ。

「ぼんやりするな。柳が住居だ。女の家だぞ。聞くことがありやどこでも聞かれるが、

わざとここん処へ引張つて来たのには、何か吾々に思ふ処がなければならぬ。その位なことは、いくら無神経な男でも分るだろう。家族は皆追出してしまつて、李花は吾々の手の内のものだ。それだけ予め断つておく、可か。

さ、こう断つた上でも、やつぱり看護員は看護員で、看護員だけのことをさえすれば可^い、むしろ他^{ほか}のことはしない方が当^{あたりまえ}前だ。敵情を探るのは探偵^{かかり}の係で、戦^{たたか}にあたるものは戦闘員に限る、いうてみれば、敵愾^{てきがいしん}心を起すのは常業のない閑人^{ひまじん}で、進^{すすん}で国家に尽すのは好事家^{ものずき}がすることだ。人は自分のすべきことをさえすれば可^い、吾々が貴様を責めるのも、勿論のこと、ひまだからだ、と煎^{せん}じ詰めた処そういうのだな。」

神崎は猶^{ため}予らわで、

「さよう、自分は看護員です。」

この冷^{ひやや}かなる答を得て百人長は決意の色あり。

「しつかり聞こう、職務外のことは、何にもせんか！」

「出来ないます。余裕があれば綿^{めん}織^{さんし}糸を造るです。」

応答はこれにて決せり。

百人長はいうこと尽きぬ。

海野は悲痛の声を挙げて、

「駄目だ。殺しても何にもならない。可^{よし}、いま一ツの手段を取ろう。権！ 吉！ 熊！ 一件だ。」

声に応じて三名の壮^{わかも}佼は群を脱して、戸口に向えり。時に出口の板戸を背にして、木像のごとく突^つ立ちたるまま両手を衣兜^{かくし}にぬくめつつ、身動きもせで煙草をのみたるかの真^ま黒なる人物は、靴音高く歩を転じて、渠等を室外に出^{いだ}しやりたり。三人は走り行きぬ。走り行きたる三人の軍夫は、二人左右より両手を取り、一人後より背^{せな}を推して、端麗多く世に類なき一個清国の婦人の年^{とし}少なるを、荒けなく引^ひ立て来りて、海野の傍^{かたえ}に推据えたる、李花は病床にありしなる、同じ我家の内ながら、渠は深窓に養われて、浮世の風は知らざる身の、しかくこの室に出でたるも恐らくその日^は最^{はじめて}初ならむ、長き病に俯^{おもひ}寝^ひて、寝衣^{しんい}の姿なよなく、簪^{かんざし}の花も萎^{しぼ}みたる流罪の天女^{あわれ}憐むべし。

「国賊！」

と呼懸けつ。百人長は猿臂^{えんぴ}を伸ばして美しき犠^{いけにえ}牲の、白き頸^{うなじ}を搔^か掴^{つか}み、その面^{おもて}をば仰^のけざまに神崎の顔に押向けぬ。

李花は猛獸に手を取られ、毒蛇に膚^{はだ}を絡^{まと}われて、恐怖の念もあらざるまで、遊魂半ば天に朝して、夢現の境にさまよいながらも、神崎を一目見るより、やせたる頬をさとあかめつ。またたきもせで見詰めたりしが、にわかに総の身を震わして、

「あ。」と一声血を絞れる、不意の叫声に驚きて、思わず軍夫が放てる手に、身を支えた

る力を失して後居しりいにはたと僵たおれたり。

看護員は我にもあらで衝つとその椅子より座を立ちぬ。

百人長は毛脛けずねをにかけて、李花の腹部をむずと踏ふまえ、じろりと此方こなたを流眊しりめに懸けたり。

「どうだ。これでも、これでも、職務外のことをせねばならない必要を感じんか。」

同時に軍夫の一団はばらばらと立かかりて、李花の手足を圧伏おしふせぬ。

「国賊！ これでどうだ。」

海野はみずから手を下ろして、李花が寝衣はかまの袴すその裾をびりりとばかり裂つんざけり。

八

時にかの黒衣長身の人物は、ハタと煙管きせるを取落しつ、其方そなたを見向ける頭巾うちの裡に一双の眼爛まなづらん々たりき。

あわれ、看護員はいかにせしぞ。

面おもての色は変えたれども、胸中無量の絶痛は、少しも挙動あたらに露わさで、渠はなおよく静を保ち、おもむろにその筒服ズボンを払い、頭髮のややのびて、白き額に垂れたるを、左手ゆんでにやお

ら搔^{かき}上げつつ、卓^{つくえ}の上に差置きたる帽を片手に取ると斉^{ひと}しく、肅然と身を起して、

「諸君。」

とばかり言いすてつ。

海野と軍夫と、軍夫と、軍夫と、軍夫と、軍夫の隙^{ひま}より、真^ま白^{しろ}く細き手の指の、のびつ、屈^{かが}みつ、洩^もれたるを、わずかに一目見たるのみ。靴音^{かろ}軽く歩を移して、そのまま李花に辞し去りたり。かくて五分時を経たりし後は、失望したる愛国の志士と、及びその腕力と、皆疾^とく室を立去りて、暗澹^{あんたん}たる孤燈の影に、李花のなきがらぞ蒼^{あお}かりける。この時までも目を放たで直立したりし黒衣の人は、濶歩坐中に動^{ゆる}ぎ出^{いで}て、燈火を仰ぎ李花に俯^ふして、嚴然として椅子に凭^より、卓^{ていぶる}子に片^{かた}肱^{ひじ}附きて、眼光一閃^{せん}鉛筆の尖^{さき}を透^{すか}し見つ。電信用紙にサラサラと、

月 日 海城発

予は目撃せり。

日本軍の中には赤十字の義務^{まつとつ}を完^{まん}して、敵より感謝状を送られたる国賊あり。然^{しか}れどもまた敵愾^{てきざい}心のために清国^{ていきんこく}の病婦^{びやうふ}を捉^{とら}えて、犯し辱めたる愛国の軍夫あり。委細^しはあとより。

じょん、べるとん

英国ロンドン府、アワリー、テレグラフ社編輯行^{へんしゅうゆき}

明治二十九（一八九六）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成2」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年4月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 別巻」岩波書店

1976（昭和51）年3月26日第1刷発行

初出：「太陽 第二巻第一號」

1896（明治29）年1月5日発行

※（ ）内の編集者による注記は省略しました。

※誤植を疑った箇所を、底本の親本の表記にそって、あらためました。

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2016年7月31日作成

2016年9月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海城発電

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>